

特集 食育の時代と家庭の食卓

● 食卓から考える食育とコミュニケーション

食の歴史から「食育」を考える 南 直人

「孤食」に追いやられた子どもたち!!

「孤食」の料理は愛をこめて! 奥田 和子

食卓のコミュニケーションと子どもの健康 西村 一郎

子どもだけでなく全世代に食育が必要 辰巳 芳子

「ソウルの食卓」から見える食育 高 炫美

肥満が深刻化するオーストラリア、
食習慣改善へのチャレンジ ヘレン・ケイス

コミュニケーションはカタチから 酒井 利美

脳を育むために 川島 隆太

スローという刻印 中田 晴子



食の歴史から「食育」を考える

南 直人

Written by Naoto Minami

私の専門分野は歴史学(西洋史)である。もともと近代の学問的歴史学は、政治史や外交史を中心に発達してきたので、食生活のようない日常に密接したテーマを扱うことはなかったのだが、近年の社会史の隆盛とともに、食も歴史学の研究対象になりつつある。そうした観点から、「食卓から考える食育とコミュニケーション」というテーマに沿って、「食育」や「家族の絆」などについて考えてみたい。

近年、一般的に流通している食育に関するイメージや言説は、おおむね次のようなものがある。昔はきちんとなされていた家庭教育が、昨今の核家族化や家庭崩壊現象の中で機能不全を起し、ファストフードへの依存や孤食など家庭での食行動も乱れてしまい、子どもたちの心身に深刻な悪影響を及ぼしている。そうした悪影響を防ぐために、家庭や学校、地域で正しい栄養知識を伝授したり、健全な食生活を指導していったりするべきである。

こうした主張は、現代日本の食をめぐるさまざまな弊害を告発するという点で、多くの人々の共感を呼んでいることは確かであり、食育を推進するという方向は国民的合意を得ているようにも思われる。しかし、たとえば「環境保護」といったテーマと同じように、誰も否定しがたい問題ではあるが、対象範囲が非常に広く、食育の意味するところが、それぞれの立場の人々にとって食い違っているようにも見える。こうした意味で、食育の根幹にかかわる諸問題を、歴史に立ち戻って考察してみる必要があるであろう。

まず、食育の概念と密接に結びついた家庭教育の問題から検討してみたい。石毛直道氏も指摘しておられるように、食を共にするものとも基本的な単位は家族である(石毛・鄭共編『食文化入門』講談社、一九九五年)。その意味で、食行動の規範といったものは、第一に家族内での食事の際に身につけるものであろう。ヨーロッパの歴史からみても、だいたい中世末期以降、宮廷社会が成立していく中で、他者とのコミュニケーション、すなわち社交の重要性が意識されるようになり、とくに年少者に対して食卓での礼儀作法を説いた著作が数多く出版されるようになる。こうした礼儀作法集は、最初はもっぱら貴族層に対象が限定されていたが、近世・近代になると市民層の家庭教育にも普及していった。

ただし、ここでみられる家庭や家族のあり方は、現在とは大きく異なることに注意しなければならぬ。フィリップ・アリエスなどに代表される近年のヨーロッパ家族史研究の成果によると、情愛で結ばれ、子どもへの教育に力を注ぐといった市民的家族が出現するのは近代社会の成立以後であり、近代以前の家族では、夫婦愛や子どもへの愛情は希薄で、子どもの教育も、家庭内というより地域や職業共同体の中でおこなわれていたのである(P・アリエス『子供の誕生』みすず書房、一九八〇年)。そして、早くから近代化が進展した西ヨーロッパ諸国においてさえ、一般庶民レベルで子どもへの家庭教育に十分な配慮がなされるようになるのは、二〇世紀に入ってからであった。

日欧では当然事情は異なるであろうが、一般的にいつて、工業化や都市化といった大きな歴史的变化の中で、人口構造が多産多死から少産少死へと転換し、少数の子どもにより大きな愛情と教育を注ぐようになるという傾向は、おおまかに共通するはずである。とすると、昔は食事作法に代表されるようなきちんとした家庭教育があったが今はそれが衰退したという主張は再検討を要するのではあるまいか。日本の家庭教育についても、教育社会学者の広田照幸氏は、『日本人のしつけは衰退したか』（講談社、一九九九年）の中で、最近になって家庭の教育能力が低下したという世間のイメージは「事実誤認」であることを論証している。

食育を家庭教育の面だけから見ると、このような問題点に突き当たってしまう。しかしよく考えると、食育は家庭内だけではなく、社会全体として取り組む課題でもある。その点からみると、食育とは食にかかわる学問知や経験知の体系を次の世代に伝達する営みというように、より広い脈絡でとらえることもできる。次に、食育の歴史をこうした広い視点から検討してみよう。

食にかかわる知のあり方が大きく変化するのは、一九世紀の欧米諸国においてである。この時期に、専門科学としての食品化学や栄養学が成立し、従来支的であった伝統医学に基づく「食養生学」から、近代医学に基づく「食の科学」へと、食や栄養にかかわる学問的パラダイムが転換したのである。これ以降、近代科学の言説が食の分野において支配的な役割を

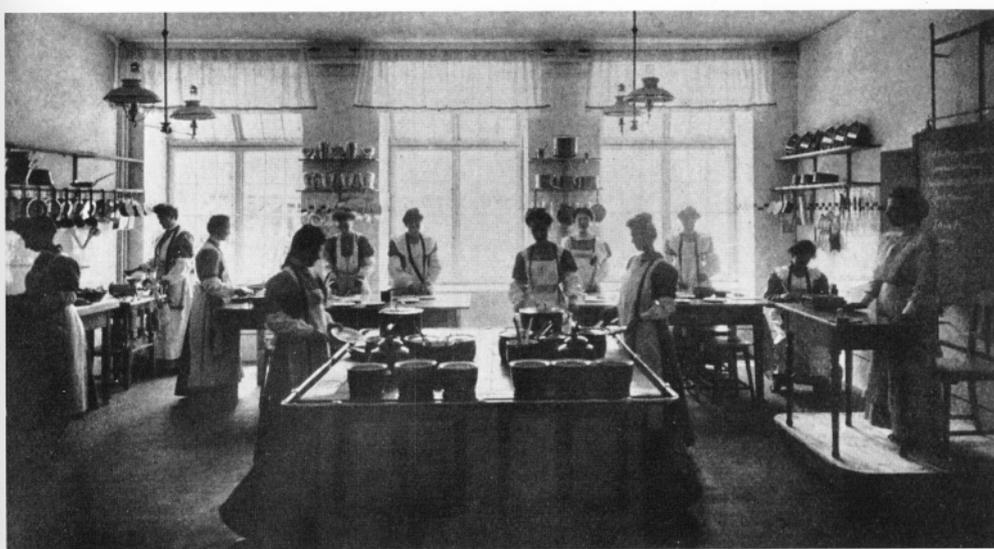
果たすようになった。そしてそれに基づいて、当時形成されつつあった国民国家が、一般民衆の食生活の改善へと乗り出しつつあった。近代の国民国家は、国民全体に対し、生産労働や兵役、家族の養育（つまり次世代の再生産）などを義務として課す一方、国民が健康で活力ある生活を営めるように社会環境を整備するという課題を担う。その重要な部分が、食生活や栄養の問題とかがわつてくる。

国家の政策として重要なのは、ひとつは広範な福祉政策であり、もうひとつは、近代的な食



17世紀ドイツの食事作法のための絵入りリーフレット

の科学を一般民衆の食生活の向上に役立てるため、食の知識を普及させること、すなわち栄養指導や食教育ということになる。そしてまた、一九世紀における深刻な階級対立を克服して国民的統合をはかる上でも、栄養学は重要な役割を期待された。当時の欧米諸国では、概して潜在的脅威とされた労働者層を国民国家に統合することをめざし、労働者層の女性に「正しい」栄養知識を提供することで、栄養状態や食生活の欠乏を緩和し、「健全な」労働者家庭の育成をはかるべきである、という



Seminarküche der Haushaltungsschule Prinzessin Arnulf, München, 1907

20世紀初頭ミュンヘンの家政学校の調理授業風景

ような主張がさかんになされた。そのために、栄養学に基づいた女性への食教育が制度化されていったのである。

二〇世紀に入り、二度の世界大戦の時期には、総力戦を戦い抜くために食にかかわる科学が総動員され、国民ひとりひとりに、戦時にふさわしい食教育が施されることになった。戦後の平和時においては、国民栄養の向上のため学校給食が導入され、国民への栄養指導や食教育は熱心に取り組まれるようになる。飽食の時代を迎えた二〇世紀末には、医療費抑制という国家的目標の下、肥満や生活習慣病などの予防のために、ますます食教育の必要性が拡大してきている。

現在唱えられている食育はさらに環境問題や教育問題など、より広い問題と関連をもつようになつており、注目すべき点として、前記のような一九世紀以来の西洋的近代科学の言説だけではなく、スローフードや地産地消といったどちらかといえば反近代的ベクトルを有する言説もかけ

られるようになつている。ただし、こつした食に関する反近代的言説は、農本主義やウェスタリアリズムのようなイデオロギーとして、すでに一九世紀末の欧米諸国において登場していたといつても確認しておきたい。

いずれにせよ、こつしてみると、広い意味での食育は、国家的レベルの政策と密接にかかわりつつ展開されてきたことがわかる。食という営みは、人間にとつてもっとも本源的なものであるが故に、食にかかわる知の伝達としての食育は、洋の東西を問わず国家や社会にとつても重要な課題であつたといえるのである。

以上、かんたんに歴史学(西洋史)の観点から、食育や家族といった問題を考えてきた。家族史研究の方からみると、家庭内での食育は、必ずしも古くからの自明の伝統といえるものではないといつことになる。むしろ食の教育は、近代国民国家の歴史において、国家や社会の要請に沿ったかたちで展開されてきたのである。現在わが国で、政府がじきじきに「食育基本法」を制定し、各省庁が食育の分野で競い合うように種々の施策を打ち出してきていることは、こつした歴史的発展の中に位置づけて理解すべきである。そしてまた、今日の食育の運動の一部において、「正しい食習慣」を国民に対して啓蒙(教化)しようといつようなややもすると押しつけがましいともいえる傾向があるといつことも、食教育そのものの本質から説明できるといえよう。

しかしもちろん、ポスト国民国家の時代といわれる現在において、国家だけが食教育を独

占することはありえない。市民社会や非政府集団のレベルにおいても、食教育の課題はきわめて重要であるといえる。環境問題や食料問題など、二一世紀を迎える地球規模での食をめぐる課題が深刻化している現状をかんがみれば、それを解決するため、食をめぐる学問知と経験知をいかに統合して、次世代に伝達していくかといったグローバルな視点から食育を考えていくことが必要であると思われる。

道徳主義的イデオロギーに基づいて展開されるのではなく、より広い社会的コンテクストの中で構築されていくべきものとなるだろう。学校教育や子どもものしつけといった問題も重要であり、そのために食育を推進するというのもあつてよい。しかし、子どもたちに伝えるべきはより広い内容であり、二一世紀に生きる地球市民としての食の知識と「モンセンス」であろう。また、食教育は子どもだけが対象ではない。むしろ大人に対する食育が必要である。これは単に子どもに教えるため大人が必要とする



ブリア=サヴァラン

というのではなく、大人自身のために必要なのである。その際に、健康を維持するための食の知識は最低限必要であることはいうまでもないが、そうした医者や栄養学者が説くような自然科学的知識だけでは不十分であろう。食事は人生の大きな楽しみのひとつなのであるから、そして、一八世紀後半から一九世紀前半にかけ

て活躍したフランスの食哲学者「ブリア=サヴァラン」が述べたように、食はその人の人となりや生活を反映する鏡のようなものだから、毎日の食生活の中でも動物学的満腹感だけではなく、知的な満足感や娯楽的要素が大いに必要なのではないだろうか。

食文化研究は、そうした食に関する知識を提供するのにもっとも適した学問ということができるとし、大人の食生活を充実させるための知的「ニーズ」に応えるという役割を果たすことができるであろう。私も食の歴史研究者として、食の歴史に関する知をできるだけ修得し、大人がより充実した食生活をおくることができるようなかたちで、それを提供することで、ささやかながら食育に貢献したいものである。

CEL

□南 直人(みなみ なおと)

京都橘大学文学部歴史学科教授。専門分野は西洋史学、食文化研究。著書は、『ヨーロッパの舌はどう変わったか』、『十九世紀食卓革命』(講談社)、『世界の食文化18ドイツ』(農山漁村文化協会)、『身体と医療の教育社会史』(共著、昭和堂)、『新・食文化入門』(共編著)など。